2023年7月9日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

人よ、休もう。わたしと共に

［創世記1章26～2章4節（前半）］

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。

神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。

地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」

そのようになった。 神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

天地万物は完成された。 第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。 この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。これが天地創造の由来である。

[1] 神と人間との「出会い」を語る聖書

「創世記」を先週からご一緒に読んでいます。今日は、1章の後半から2章の前半にかけての所になります。ここには、「人間」の創造、動物、植物の創造が書かてれあり、創造の「第七日」目は、神様は「安息」されたという「安息日」の由来のことが記されています。

　人間が神によって造られたという記述を荒唐無稽と考え、「進化論」を学問的真理として捉える者たちにはバカバカしいものだと思われるということがあるかも知れません。しかし、私はバカバカしいとは全く思いません。ここには、神様からの深い真理が示されていると思うからです。かと言って、私は科学も、その研究も否定しません。自然科学、歴史学、医学、考古学、どんどん研究して良いと思います。ただ、聖書が示している真理は、「神様と人間との出会い」を語るものです。さまざまな学問的研究とは次元が違うのだと思います。言い方を変えれば、様々な研究が進むと「神様の存在が消えてしまう」と不安になる、という考えもあると思いますが、私はそうではないのではないかと思います。虚心坦懐に科学をすればするほど、むしろこの世界の神秘、宇宙の神秘、人間の神秘に圧倒されて、謙虚にならざるを得ないのではないでしょうか。神様は、人間のアタマを遥かに超えた存在だと私は思います。そして、私は、その‟人間の立ち位置”というものがとても大事なのではないかと思います。

[2] 無限のお方が、有限の存在を造られた

「初めに、神は天地を創造された」と創世記1章1節にはありました。それで神様のことを「創造主」ともいう訳ですよね。神様は創造主。でも改めて考えてみると、面白いなと思ったのです。変な言い方にもなりますけれども、神様は、たとえこの世界を創造なさらないことも出来たでしょう。それでも神様は神様の筈です。しかし聖書はそうは言いません。「初めに、神は天地を創造された」と。これはどういうことでしょうか？―無限のお方が、有限の存在を造られた、ということではないでしょうか。暇を持て余したから、なんてことはないと思います。神様は、ハッキリとした意志を持たれて、この美しい地球も、そしてこんな素晴らしい人間存在も、考え抜かれてお造りになったのだと思うのです。それは、神様の愛ゆえです。神様はご自分以外のものを愛したかった。―「初めに神は天地を創造」されました。愛を込めて。しかも、造りっぱなしではありません。造られた被造物をご自分の目で確かめておられる。そして何と言われたか。1:31です。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。 」　単なる合格点というのではなく、神様がご覧になって造られたものは皆、花丸もよいこと、100点満点として、神様ご自身が喜ばれたのです。そしてそれは他ならぬ私たちのことです。私たちは、自分自身のものさしや、ましてや他人が勝手に作ったものさしに左右される必要は無いのですね。これは、私自身、本当に励まされます。私は小学生の時から自分自身のことを本当につまらなくて取り柄のない人間だと思っていました。けれども私は教会に行き、イエス様と出会うことが出来るようになって、初めて自分自身のことを受け入れることが出来るようになりました。大切なのは、神様の目です。「見よ、それは極めて良かった」。私たちは皆、神様の可愛い子供なのです！「私はあなたを愛している。私はあなたの名を呼んだ」（イザヤ書43章より）。

そして、神様は人間を創造されたのですが、聖書はここで決定的なことを語っています。1:27。「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。」先ほど、無限な存在が、有限な存在を造ったと申しました。人間もまた「形」があり、それ故に有限な存在です。しかし驚くべきことに、神様は人間をお造りになった時、「神にかたどって」、つまりご自身の形に似せて、人を造られた、と言うのです。凄くないですか!? 詩編の言葉の中にも「人の子（人間）は何ものなのでしょう。神よりも僅かに劣るものとして人を造り」（詩篇8:5、6）と言っています。ですから私たちが誰かを蔑む、ということは神様を蔑むこととほぼ一緒です。私たちが誰かを叩くということは、神様を叩くということと同義語です。でも、それを私たちはやってしまいましたよね。あのイエス・キリストを叩いたのは誰なのか。イエスを十字架につけたのは誰なのか…ということです。けれども、神様は、もう丹精込めてと言ったら良いでしょうか、ご自分の思いの丈を尽くされて人間を、私たちを、造られたのです。どうでも良い存在を神様はお造りになる筈がありません。だから、神様はどんな私たちであろうが愛し抜かれて、イエス様を十字架にお架けになることを良しとされたのです。私たちが神様の前に永遠に失われないための愛のご決断です。

[3] 「神様の安息」に向かっている私たち

　「神は、ご自分にかたどって…男と女とに創造された」とありました。これは大きな神秘です。神様は、男も女も創造出来るのです。男と女に創造された、それは神と人間の愛の関係を、人間の他者同士の中に「ひな型」として贈って下さったということではないでしょうか？ある意味全く別の存在を、神様はご自分の形としてこの世界に送って下さった。神様は交わりの神様です。神様はお独りで存在することを望まれない。寂しがり屋なのかなと思う位に。そして人間同士も、異なる存在が受け入れ合って生きる世界を、私たちにプレゼントして下さったのではないでしょうか。

そして、私は今日の箇所を読んでいて、この神様の世界の素晴らしいゴールが示されていることを思わされました。2:1から。「天地万物は完成された。 第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。 この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。これが天地創造の由来である。」

神様は七日目には「御自分の仕事を離れ、安息なさった」とありました。言い替えれば神様は、「休み」「安息」を創造されたのです。しかもその日を「聖別」されました。天地創造、人間の創造は、この安息があって完結しますし、天地創造の全ては、実はそこに向かっていると言って良いと思います。「安息日」というのは七日目のおまけじゃないのです。疲れたからお休みというのではない。神様の休みというのは、グーグー寝ているということではないと思います。そうではなくて、「満たされている」のだと思います。それがあるから、被造物が命を得ている意味があると言いましょうか、パズルが全部はまっていると言うか、この世界の「完成形」です。そういう、神様が満たされている世界の中に、神様は私たちを招いて下さっている。あなたのゴールはこれだ、と。だから、最初に申しました、創世記は、神様と人間の出会いの書であって、「神様」があってこその「人間」という立ち位置なんです。私たちは神様の「安息」の中に生かされています!

ある牧師先生が、私は間違っていたと仰いました。「（教会で仕え）、『限界まで』『力尽きるまで』は自分自身をささげ尽くさなければと思うと、休むことに罪責感のようなものを感じていた。しかし、ある時気が付いた。そうではない、心も生活も神様に全く委ねて主を崇める時、安息の喜びが得られるのだ。そして、それこそ礼拝だった」と。そしてこうも言われました。「安息日は、自分の働きを過大評価している人への挑戦なのです」。…私たちの出来ることなど、たかが知れています。私たちは「これでなければ自分じゃない」と思えるものをもっと手離して良いのだと思います。これは、私自身に対するチャレンジでもあります。

神様は、この世界を、ある意味私たちに委ねて下さっています。神様お独りでお出来になることを「協働」しようと、私たちを敢えて用いて下さるということも今日の箇所では見えてきます。しかし、だからこそと言いますか、神様は私たちを大切に扱って下さいます。私たちが潰れないように、七日ごとに安息に招いていて下さるのです。そして、最後には究極の安息、神様は私たちと本当に交わる日を楽しみにしておられるのです！神様は私たちを決して孤独にはさせません。私たちもまた、この一週間も、この主の胸の中に安息を見出して行きたいと思います。―「重荷を負って労している者は、わたしのもとに来なさい。あなたを休ませてあげよう」（マタ11:28）。

お祈り致します。

神様、私たちに命を注ぎ込んで下さってありがとうございます。この命は私たちが造った命ではありません。あなたが深い愛を持って造って下さった、代わりのない、一人ひとりの命です。そして、主イエス様さえも私たち一人ひとりのために与えて下さいました。深く感謝致します。そしてあなたは、七日目、安息を造られました。私たちの命はそこに根があることを教えて頂きました。どうか、全き信頼の中で、互いを受け入れてゆく「共に生きる世界」を、あなたと共に生きて行くことが出来ますように。今試練の中にある方に、あなたの大いなる平安の約束を示して下さいますように。主イエスの御名によって祈ります。アーメン。